

学位論文要旨

所属専攻 環境共生工学専攻

氏名 磯田桂史

論文題名 明治期熊本における近代工業建築の研究

要旨

本研究は、明治期熊本における近代建築の中で、その一分野をなす工業建築に関する研究である。工業建築は近年、産業遺産として注目を集めており、工業建築に関する研究は日本の近代化を支えた建築技術の発展を知る上で、重要な研究と考える。

明治期の近代建築については、全国的な研究はあるものの、大都市圏を除けば都道府県レベルの研究は、まだ不十分であり、熊本県においても断片的な研究にとどまっている。全国的にみれば熊本県には明治期政府機関が数多く立地し大都市圏に次ぐ近代建築先進県と考えられることから、熊本県の近代建築の歴史を体系化する必要があり、その研究の第一歩として工業建築を取り上げる。そしてそれらの建築について建築的特徴や建設経緯を明らかにするのが本研究の目的である。

本論文では第1章において以上のような背景、研究の目的と方法を述べた。第2章においては明治期熊本における主要な近代建築に注目し、従来の研究も参考にしながら、その歴史について概観した。従来断片的な研究にとどまっていた熊本明治期の近代建築の歴史を、一連のまとまった歴史的叙述とすることを試みた。まず熊本に本格的近代建築が登場する明治20年前後をひとつの画期ととらえ、それ以前とそれ以降に時代を区分した。明治前期では、先ず明治3年政治体制の改革により近代化が始まり、その翌年熊本医学校及び洋学校が設立され、そこに招かれたマンスフェルト及びジェーンズのための住宅が建てられ、これが熊本の近代建築の最初の例といえる。その後明治10年代まではいわゆる擬洋風建築の時代であり、主として縦長窓漆喰壁という意匠を持つ木造建築が建てられた時代であった。全国レベルでは擬洋風時代にあったとされる木骨石造や下見板張りの建物は、熊本においては殆ど見られないことが明らかになった。そして明治19年末の熊本県庁及び明治22年の第五高等中学校において、初めて構造、意匠、規模などの点から、本格的近代建築と呼べる建物

が登場した。それ以降、明治後期になると近代建築は様々な分野に普及し、また建築の構造も木造ばかりでなくれんが造も広範につくられるようになった。

第3章では、明治27年地元財界が興した熊本紡績(株)の工場を取り上げ、その平面計画が紡績機械メーカー作成の機械配置図に従っているものであることを明らかにした。現在この工場は取り壊されてされてしまったが、取り壊し前に実測し図面を作成し、その図面及び各種日本側の資料と英国の紡績機械メーカー側の資料とを照合することにより、上記のことを明らかにした。ただ、メーカー側のプランを全く鵜呑みにしたのではなく、それに地震対策等の日本独自の技術上の必要性を加味して建設していることは注目すべき点である。

第4章では、水俣市において現役の工場として使用されているれんが造の建物について実測図面をもとに建築的特徴を解明した。さらにこの工場は、日本で明治期後半興った電気化学工業の先端技術ともいうべき石灰窒素肥料製造のため、日本窒素肥料(株)が明治42年に建設したものであることを明らかにした。

第5章では、明治期の工業界に必要な高等教育を受けた技術者を育成するため全国5番目の学校として設置された熊本高等工業学校本館について、古い平面図面と古い写真をもとに、その平面図及び立面図を復元し、これによりその建築的特徴について分析した。明治41年に建設された洋風木造の本館は、大正期に焼失し、現在では大正期の簡単な単線の平面図と写真しか残っていない。この平面図と当時の他校の事例から平面図を復元し、ついでこの復元平面図と当時の写真を用い図学的方法により立面図を復元した。その結果、建築面積が当時の記録と一致したことから平面図の復元作業は正確なものであることが証明できた。これらの復元図面と当時の写真をもとに、平面では廊下を南側に配置している点は当時の文部省の学校建築では希有な例であること、立面ではファサードのうち双塔形式は明治40年代の文部省の学校建築では最も早い例であること、マンサード屋根は当時数校で採用されていることを明らかにした。

第6章では、研究を総括した。明治期の熊本における大規模な工場はいずれもれんが造の工場を持っており、第五高等中学校に始まる熊本のれんが造建築の歴史は工場建築にも引き継がれた。また、第五高等中学校の平面計画は、熊本高等工業学校本館の平面計画にも影響を与えており、熊本の明治期の建築では第五高等中学校が重要な位置を占めることが明らかになった。

以上のように本研究では、明治期熊本の近代建築、特に工業建築について体系的な歴史研究の第一歩を印すことができた。